



株式会社クレディセゾン

大規模キャンペーンのビジネスKPIを可視化 Mackerelを用いてDevOpsモデルを実現

クレディセゾンは、お客様へのスピード感のあるサービス提供に課題を持っていたが、AWSとMackerelによるDevOpsモデルの採用で、システム開発運用を内製化して、迅速なサービス提供体制を実現することが出来た。更にMackerelのダッシュボード上にビジネスKPIも追加して、サービス利用状況とそのビジネス進捗を関連付けて可視化することで、ビジネスニーズに対応する継続したシステム開発運用を行っている。これによりお客様に継続した価値向上を提供できるようになった。



クレディセゾン様がAWSとMackerelを選んだポイント

AWSの選定ポイント

- 1 柔軟性と素早いリソース調達でアジャイルなシステム開発体制を実現
- 2 充実した各種マネージドサービスが容易に連携可能
- 3 Amazon API Gateway と ALBのVPC Linkを介した統合機能

永久不滅ポイントのセゾンカード・UCカードなどを展開する株式会社クレディセゾンでは、新設部門「テクノロジーセンター」で自社開発した大規模サービス「セゾンのお月玉」のインフラ基盤をAWSにて構築し、監視に「Mackerel」を活用しています。サービスの適切な管理運用だけでなく、ビジネス上のKPIも「Mackerel」のダッシュボードで可視化しています。今回はクレディセゾンテクノロジーセンターの松尾貴司さん（プロダクト担当・1995年入社）と仙波大和さん（サーバー担当エンジニア・2019年入社）に、メールインタビュー形式で「AWS」「Mackerel」導入の経緯や活用について伺いました。

AWSとMackerelを採用した背景と理由

まずは、おふたりが所属する「テクノロジーセンター」について教えてください。

松尾さん：テクノロジーセンターは2019年3月に新設した部門です。優位性や差別化となるサービスのシステムを内製開発し、当社のデジタルトランスフォーメーションを推進することが当部門の役割です。そのために、多方面で活躍するエンジニアを募集し、チームを発足しました。当社のCTOである小野が、テクノロジーセンターの部門長を兼務しています。

「テクノロジーセンター」最初の仕事がAWS、Mackerel導入のきっかけになった「セゾンのお月玉」だったと伺いました。自社開発されたという「セゾンのお月玉」について教えてください。

松尾さん：「セゾンのお月玉」（以下、「お月玉」）は、セゾンカード・UCカードのスマートフォンアプリ「セゾンPortal」「UC Portal」（以下、セゾン／UC Portalアプリ）を月1回以上ログインかつカードショッピング500円（税込）ご利用ごとに抽選券を1日最大3枚

Mackerelの選定ポイント

- 1 複数人でのメトリック監視体制が簡単に構築可能
- 2 ビジネスKPIを各種サービスから取得・統合しグラフ化
- 3 AWS上での運用を「DevOps」モデルに発展できる

プレゼントし、毎月抽選で1万人に1万円をプレゼントするというサービスです。

普通でしたら1万円分のキャッシュバックやポイントをプレゼントするかもしれませんが、お客様にもっと喜んでいただくために1万円を現金書留でお届けしています。

既存のシステムに接続し、お月玉の抽選券枚数を集計するための専用サーバーを自社開発しました。また、お月玉の抽選券獲得枚数や抽選結果をセゾン／UC Portalアプリに表示する機能も自社開発です。

テクノロジーセンター発足前はシステム開発を外注に頼っていましたが、お月玉についてはアジャイルな自社開発手法を取り入れることができ、常にアップデートしています。

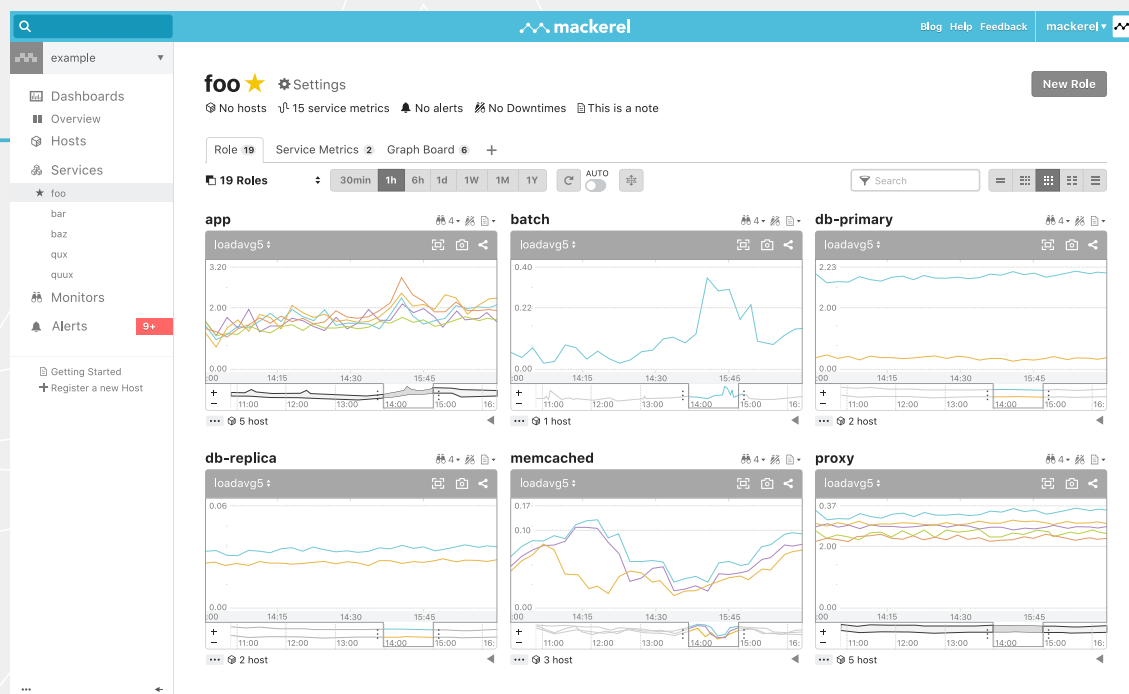
サーバー構成としてどのような課題をお持ちで、AWSをどのように今回活用されたかお聞かせください。

仙波さん：弊社のサービスはそのほとんどが HELIOS と呼ばれる大規模基幹システムと、それを取り巻く周辺システムが、オンプレミス環境で運用されており、機能追加にはたくさんの検証工程が必要です。更にセゾン／UC Portalアプリのサーバーに関しても委託先に開発から運用まですべてを任せている状態だったので、スピード感のある機動的なキャンペーンを展開するには不向きなシステム開発運用体制でした。

お月玉ではこの課題に対して、企画から開発、広報、法務に至るまで複数部署にまたがったタスクフォースとAWSの柔軟性と素早いリソース調達でアジャイルなシステム開発体制を実現して、お客様への素早いサービス提供が可能になりました。

構成上の工夫点などがありますか？

仙波さん：セゾンのお月玉システムは、基幹システムから拠点間VPNを取り回したデータ連携を行うデータ連携基盤と、セゾン／



MackerelのWebコンソール。メトリックを役割ごとに任意の単位でまとめてグラフ化できる。

UC Portalアプリとの通信を請け負うAPIサーバーで構成されています。

センシティブな情報は隔離されたデータ連携基盤で取り扱っており、集計後の処理済みのデータだけがAPIサーバーにバッチ処理で連携されます。

APIサーバーはAWSの各種マネージドサービスを利用した標準的な構成で、運用の簡単さを第一に考えました。マネージドサービスが充実していて、それらを簡単につなげることが出来ることは、AWSを採用した理由にもなっていました。

GitHubとAWS CodePipelineを使ったCI/CDでAmazon Simple Storage Service等に配布された成果物を、サーバーが自身に付与されたタグを利用して自動的にサービスを構成するようになっており、必要な環境変数などもAWS Secrets ManagerやAWS Systems Managerから取得するようになっています。タグを利用することでMackerelの監視と合わせて管理できるので手がからず楽をさせてもらっています。

仙波さんは前職でもMackerelをご利用いただいていたと伺っています。今回のMackerel採用の経緯についてお聞かせください。

仙波さん：はい、前職では在職期間の途中からサーバー監視にMackerelを導入していました。

今回の新規サービス開発にあたっては、初回リリースから多数の利用者が見込まれるサービスであり、適切な管理運用でシステムの可用性を高める必要がありました。サーバーメトリックを見るだけならAWSにはAmazon CloudWatchがありますが、複数人で気軽にメトリックを監視する必要があり、チームですばやく障害監視体制を構築したかったのです。そこでメトリックを任意の単位でまとめられるグラフや、簡単に設定できるアラート通知でSlackと連携できる「Mackerel」を採用しました。また、「お月玉」はあくまでもセゾン／UC Portalアプリ、もっと言えばクレディセゾン全体のお問い合わせシステムのサブシステムなので、サービ

ス開発にあたっては「お月玉」サービスにどんなに負荷がかかっていても既存のサービスには影響が出ないように設計を行いました。その運用にあたってはチームの管理下でない一部のオンプレミスなサーバーの監視も必要で、そちらも一緒にMackerelを導入してAWS上のサービスと統合的に監視を行うことも出来るからです。たとえ規模の大きいキャンペーンでも、そのキャンペーンのせいで本質的な業務に影響が出てしまってはライフライン企業とは名乗れないですからね。

ビジネスKPIと運用情報をダッシュボードで可視化、ライブ感とユーザーの反応をダイレクに共有したDevOpsモデルを実現して顧客満足に貢献

運用いただいていたのでしょうか。

仙波さん：サービス監視にとどまらず、サービス開発運用を内製化出来るエンジニアがいて、どんな指標によってサービス運用しているかを可視化し、ビジネス指標とは違った目的を社内に対してよりわかりやすく伝えることができ、社内のデジタルトランスフォーメーション促進に役立っています。

「お月玉」の運用では、ビジネス上のKPIをMackerelのダッシュボード上に可視化しているそうですね。

仙波さん：KPIとしてグラフ化するのに必要なデータは、専用の集計サーバーから運用サービスのRead replicaやGoogle Analytics、SNSのAPIなどを利用して取得しています。もちろんこれらにはクレジットカード利用情報などのユーザーのセンシティブな情報は一切含まれておらず、全体としての累計抽選券発行枚数や、キャンペーンページ等の前月比をリアルタイムに反映するようなものになっています。

そのような活用をされた経緯や背景について教えてください。

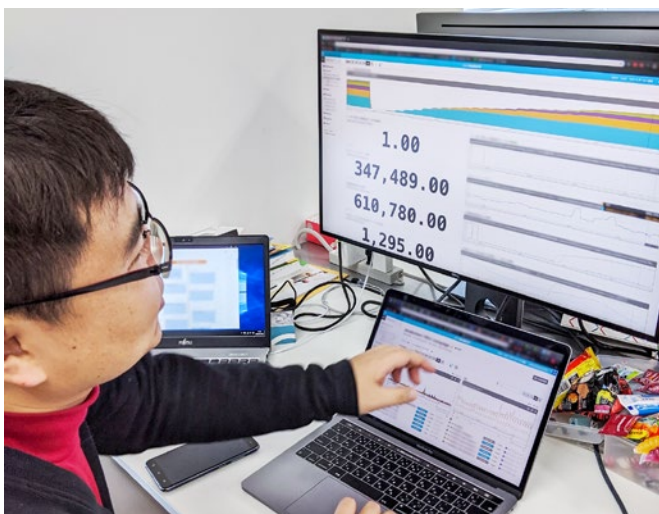
仙波さん：もともと自社サービス開発を行うにあたって、サービス運用にまつわる速報性と可視化をこれまでにないレベルで社内に届けたいという考えがありました。今までは、開発委託先が月に一度の運用レポートを、専門家ではない担当社員に届けるという体制でしたが、AWSとMackerelを導入することで、毎分更新される最新の運用情報を、普段慣れ親しんだビジネス指標と一緒に届けることが可能になりました。あと、これも重要な点なのですが、ビジネスメンバーにもアカウントを発行して気軽にダッシュボードを見てもらえるようにして、よくありがちなエンジニアによる資料作成などの工数も削減しました。

「お月玉」は顧客満足向上の為に「わくわく」を届けたい!というコンセプトがあります。そしてMackerelによって、サービスを届けているというライブ感とユーザーの反応をダイレクトに体験することが出来るようになり、社内向けにも「わくわく」を届けられるようになりました。まさに継続的アプリケーション開発と運用にそのビジネス成果が連携するDevOpsモデルが実現出来ていると感じています。

アカウント数に制限がなく、ビジネスメンバーもダッシュボードに招待でき、システム開発運用がビジネスに与える影響を共有できる

今後、クレディセゾン テクノロジーセンターとしてチャレンジしていく領域はどのようなものでしょうか。そこでMackerelはどのように貢献できるのでしょうか？

松尾さん：当社がもつ強みをより強化すべく、スマホ・デジタル時代に即したペイメント事業へのリニューアルにチャレンジしていきます。そういったチャレンジにおいても安定稼働というのはお客様の信頼のベースになるので引き続きサポートをお願いします。また、プロダクト担当やマーケティング担当がMackerelを活用していくことにもトライしていきたいと思います。



AWSインテグレーションイメージ図



最後に、MackerelとAWSに対するご感想とご要望についてお聞かせください。

仙波さん：Mackerelの良い点として利用アカウント数に制限がないところがあります。アカウントは無料で作成できるので、ダッシュボードに気兼ねなくビジネスサイドのメンバーを招待できて、システム開発運用がどうビジネスに影響を与えているかを共有出来るようになったことは良いですね。また、導入が容易でpush型なので経路さえ開ければ多様な構成で利用できるので、一部のアクセス権限のないサーバーについては委託会社に作業してもらっています。具体的な要望はいくつかありますが、まずユーザーに対するダッシュボードごとの閲覧権限設定機能が欲しいです。これは事業会社特有なのかもしれませんが、委託企業のインフラ担当者にもデータを見てもらいたいとなったときにビジネスKPIのダッシュボードを作っていると入ってもらえないことです。オーガニゼーションを分けるのは運用が大変なので、APIも含めて権限操作が出来るととてもありがたいです。次に、グラフアノテーション*の拡張をお願いしたいです。ロールやサービスでは使えますが、ダッシュボードでは使えないのでダッシュボード対応がなされると今後の運用に活かせそうです。

個人的にAWSとはかなり長い付き合いなのですが、最近はCSSや多言語対応なUIへの投資を積極的に増やしてくれているのか、一昔前に比べるとマネジメントコンソールの改善がずすみとても扱いやすくなりましたが、IAMポリシーの設定などを、エラーログから最小限の権限追加の自動化なんてできたら素敵かなと思います。

また、最近発表されたAmazon API GatewayとALBのVPC Linkを介した統合機能にはとても期待しています。API Gatewayを経由することでアプリケーションの実装をよりシンプルに、ALBのパスルーティングで機能ごとにビジネスロジックに集中させることができるのでは無いかと考えているので、ドキュメントの整備と機能間のデバッグ方法をより改善してもらえたらと思います。

※グラフアノテーションは、Mackerelのグラフ上に様々な事象をアノテーション（注釈）として残せる機能です。

このように、AWS上でのスピード感のある開発・運用を実現するDevOpsモデルとその中核となるMackerelによって、クレディセゾンのシステム開発の内製化と新サービスの提供を素早く提供できるシステム基盤が出来たのである。

mackerel